

小美玉の風を愛した「橋村」をミュージカルに!



演劇ファミリーMyuファミリー
 「かぜにうたえば」生みの親

こばなわよしすけ
小 埜 義 輔 さん

「演じる子どもたちの目が輝いているのを観るのが楽しみ」と語る小埜さん

みの〜れと共に生活するスタイル
Minole Life
 のすすめ No.105

春は出会いと新しいスタートの季節。そして、野山を桜色に染める桜が咲きますね。昔のお花見は農耕儀礼のひとつだったそうです。今年も四季の里芝生広場とみの〜れで盛大にさくらフェスティバルが開催されます。その中で、みの〜れ住民劇団演劇ファミリーMyuが「かぜにうたえば」を公演します。今回は、「かぜにうたえば」の主人公である明治時代の詩人『清水橋村』（小川地区出身）を発掘してくれた小川地区にお住いの小埜義輔さん取材します。

みの〜れで

「橋村」と会おう!

小埜さんは、水戸市に住んでいましたが、退職を機に生まれ育った小川地区に戻ってきました。『清水橋村』を知るきっかけと、興味を持った理由を聞いてみると、「茨城の詩人について詳しい茨城女子短期大学の小野孝尚学長から、小美玉市には『清水橋村』という天才的詩人がいたと聞いたのがきっかけです。『清水橋村』は、明治初期のころ東茨城郡橋村（旧小川町）で幼少時代を過ごしました。開拓民で、苦しく貧しい生活をしてきたそうです。『橋村』にとって、この小美玉での暮らしは、人生で一番苦しかったであろうと思われるのに、詩人としての名をあえて『橋村』と名づけたところに興味が沸きました。また、『橋村』は故郷の景色を多く詩に書いています。『橋村』

の心の中のふるさとはこの小美玉で、この地をどれほど愛していたのだろう...と思えます」と小埜さん。

『橋村』とミュージカルが結びついた経緯は、「亡くなった妻が和紙絵画をやっていた、遺作品展をやってもらえないかと、みの〜れを訪れました。その打合せの中で、常々思っていた『橋村』のことを話したのです。『橋村』という人物が小美玉にいたことをみんなに知ってもらいたい、どうしたら知ってもらえるかを考え、ミュージカルにならないかという話を話したのを覚えています。その後、小野学長をはじめ、Myu制作の方々、みの〜れ職員の方の力によりミュージカル化が実現しました」と、小埜さんは当時を振り返りました。

ミュージカル「かぜにうたえば」に対する思いを聞いてみました。「『橋村』を知ること、『橋村』と、郷土愛、ぬくもりの心感じてもらえればと思います。人と人が繋がってつくり上げた

素晴らしい作品です。2013年4月に公演した「かぜにうたえば」を観た時、小さな子ども達が一生懸命、爛々と目を輝かせてミュージカルをやっている姿にとても感動しました。本当にミュージカルになって良かったと思います。小美玉の埋もれた財産を磨けばどこまで光るか・光を差し込みたかったのです。いい経験ができました。今回の再演も楽しみです」と小埜さんは話してくれました。

小埜さんは歴史に詳しく、すらすらとお話してくれるので何故か聞いてみました。「多病息災の81歳。趣味で古文書を解読し、解説を付けてパソコンに入力しています。NHKの古文書の通信講座もやっています」と、年齢よりずっとお若い笑顔が印象的でした。

4月2日は、みの〜れ森のホールでMyuの「かぜにうたえば」素晴らしい公演をぜひ観に来てください。
 (藤田佐知子)